**応天門**

平安神宮は、日本の平安時代（794～1185）の首都であり、現在の京都の前身でもある平安京にあった天皇御所を8分の5の規模で復元したものです。応天門は、天皇御所の正庁・朝堂院の正門を復元したものです。この応天門は18.43メートルの高さがありますが、元となった門はこの2倍近くの規模で、さらに堂々とした佇まいをしていました。

門を抜けて中に入ると、壁に囲まれた中庭になっており、複数の建物が立っています。大極殿（外拝殿）は応天門の向かい側、中庭のはるか向こうにあります。ここが神社の参拝をすることができる正殿となります。神社の庭園への入口は、大極殿の左側、白虎楼の隣にあります。

平安京は、日本の古き都である奈良県の平城京（710～794）に由来しています。平城京自体は、中国の唐王朝（618～907）の首都であった長安（現在の西安）を模しています。これらの都はどちらも、北向の格子状に設計されており、正門が南を向いていました。これは、中国式土占いや風水の基盤となった、古代中国の思想である五行思想（５つの元素）の原理に従ったものです。